

# ダ・ヴィンチ・コード

2006(平成18)年5月18日鑑賞(試写会・ナビオ TOHO プレックス)

★★★★



監督＝ロン・ハワード／原作＝ダン・ブラウン／出演＝トム・ハンクス／オドレイ・トトゥ／イアン・マッケラン／ジャン・レノ／ポール・ベタニー／アルフレッド・モリーナ／ユルゲン・プロホノフ (ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給/2006年アメリカ映画/150分)

……06年1番の話題作を、5月20日の世界同時公開に先立って鑑賞。原作を読んでいない私にとって、複雑に絡み合う「謎解きゲーム」は難しいが、そのスリリングな展開は緊張感がいっぱい。興味深いのは、「聖杯」「マグダラのマリア」など、イエス・キリストに直接絡む物語の数々と、中世ヨーロッパを特徴づける秘密教団や結社の存在……。アツと驚いたのは、イエス・キリストにはある女性との間に生まれた子供がいたという「仮説」。映画を観ているとそれなりの説得力があるが、さて、その真相は……？ こりゃ、カトリック教会との一悶着は必至……？

## 「読んでから観るか」「観てから読むか」

「読んでから観るか、それとも観てから読むか」とよく言われるが、この映画は多分、観てから読んだ方がいいもの……。なぜなら、長編の原作を先に読破している人は、複雑に絡み合ったストーリー展開だけではなく、アツと驚く結末も当然知っているのだから、映画を観てもそれに驚くことはなく、どのように映像化されているかにしか興味がないことになるはずだから。その点、私は原作を全然読んでいないし、どんなストーリーかについても誰からの情報も入っていなかったため、全く白紙の状態での映画を鑑賞することになった。そのため、かなり難しいところはあったものの、その複雑ながらスピーディーでスリリングなストーリー展開にハラハラドキドキするとともに、アツと驚く結末に単純にビッ

クリすることができた。

余韻を味わいつつ知識を「復習」するためには原作にチャレンジした方がいいのかもしれないが、今の私にはそこまでの時間的余裕がないうえ、私としてはこの映画を観た感動だけで十分……。

## 今年最大の話題作が5月20日、世界同時公開

ダン・ブラウンによるこの映画の原作は、2003年の刊行以来、44カ国語に翻訳され全世界で5000万部を超える大ベストセラーになったもの。この原作の大ヒットを受けて映画化された『ダ・ヴィンチ・コード』は、関連本が出版されたり、テレビで特集番組が組まれたりしたこともあって、今年最大の話題作となっている。そして、配給会社もしっかりしたもの。できるだけ観客に我慢をさせたくえ、世界で一挙に同時公開した方が注目を集めると読んだ結果、公開は全世界一斉に5月20日と決定された。したがって、今日5月18日午前8時30分から上映された先行試写会は、今日1日だけの貴重なもの。これは、仕事をサボってでも何としても観なければ……。

## 謎解きの最大のポイントは……？

この映画が宣伝ネタとして使っているのは、レオナルド・ダ・ヴィンチの『モナ・リザ』や『最後の晩餐』そして『ウイトルウィウスの人体図』。それはきっと、日本人を含む全世界の多くの人たちがそれをよく知っているから。しかし、残念ながら日本人はキリスト教の知識が乏しいから、この映画最大のテーマである「イエス・キリストとマグダラのマリアとの間に女の子が生まれていた」という仮説は、それ自体きわめてわかりづらいもの……？

マグダラのマリアとは、キリストに救われた娼婦で、『パッション』（04年）ではモニカ・ベルッチが演じていた女性。しかし、このマグダラのマリアについてそんな仮説があろうとは……？

この最大のテーマをめぐるのは、映画公開を前にしてカトリック教会から抗議の声があがっていることが、5月18日付日経新聞に載っていたが、そりゃそうだろう。外野席（？）としては、この映画をきっかけとしたこの論争が1つの見モ

ノ……？

## カトリック教会をめぐる2つの潮流とは？

もしイエス・キリストとマグダラのマリアとの間に娘が生まれていたとすれば、その子孫たちは……？ このテーマをめぐって、イエス・キリスト死亡後今日まで2000年間にわたって争い続けてきたのが、各種の教団や秘密結社……？ 日本人はこういう問題にトンと疎いが、この映画に登場するその2つの潮流がシオン修道会とオプス・デイの2つ。

シオン修道会の方は、一体何を狙っている組織なのかよくわからないが、あえてここで1つだけネタばらしをすれば、映画の冒頭、ルーヴル美術館の中で殺されるジャック・ソニエール館長（ジャン・ピエール・マリエル）は、実はこのシオン修道会と深いつながりが……。

## オプス・デイとは？

他方、パンフレットによれば、オプス・デイとはラテン語で「神の御業」という意味の教団（秘密結社）で、現在80カ国以上10万人以上の信徒がいるとのこと。映画ではその代表たるマヌエル・アリンガローサ司教（アルフレッド・モリーナ）の策謀とその命令に忠実に従うシラス（ポール・ベタニー）の2人がポイント。このオプス・デイは、何を目的とした秘密結社でこの映画では何をしようとしているの……？ それをきちんと理解することが大切……。

## 2人の主人公は？

この映画の主人公は、まずハーバード大学のロバート・ラングドン（トム・ハンクス）。そもそも彼が専攻している宗教象徴学からして、何のことかわからないが、それはパンフレットで勉強を……。彼は今パリで講演中だが、ルーヴル美術館の中で死体の周りにたくさんの文字や数字を書き残したまま、『ウィトルウィウスの人体図』の形で死亡したソニエールと会う約束になっていたため、彼に殺人の容疑がかけられることに……。

ラングドンの専門知識を教えてほしいと申し出たのは、フランス司法警察のベ

ズ・ファーシュ警部（ジャン・レノ）だったが、どうもそれは建て前だけで、ホントはラングドンの逮捕が目的……？

もう1人の主人公は、殺人現場に急遽駆けつけてきた暗号解読官の女性ソフィー・ヌヴー（オドレイ・トトゥ）。ソフィーは秘かにラングドンに危険が迫っていることを説明し、ラングドンとともにファーシュ警部の捜査の網から逃走。以上でこの映画が最初に示す問題提起が終わり、さあここからが本格的な謎解きの開始。しかし、警察に追われながらのソニエール殺しの謎解きは前途多難……？

### キーマンは第3の主人公

この映画は、ラングドンとソフィーが主役。そしてネームバリューからすれば（？）、その次に位置するのが一見ファーシュ警部。ところが実際に映画を観るとファーシュ警部の本格的登場は最初のシーンだけで、あとはほんのチョイ役気味……。

この映画でキーマンとなり、第3の主人公ともいえる人物は、広大なシャトー・ヴィレットのお屋敷に住む老学者（？）リー・ティービング（イアン・マッケラン）。パンフレットによれば、ここはパリから北西に行ったヴェルサイユの近くにあり、185エーカーに及ぶ広大な敷地とのこと。

なぜここにリーが住んでいるのか、その細かいことは私にもよくわからないが、警察の追及を逃れながら、謎解きを続け、やっとここに着いたラングドンとソフィーを迎えたリーは、イエス・キリストとマグダラのマリアに関するさまざまな知識を披露。この老人（？）の知識の広さと深さそして説得力にはビックリだが、一体この男は何者……？ そしてリーは、ラングドンやソフィーの味方、それとも敵……？

### 「聖杯」と「最後の晩餐」

ソニエールが死体の側に残した文字や数字についての暗号解きは、あまりに専門的すぎて、スクリーンを観ていただけではきちんとわからないから、その点に興味のある人は、是非原作をじっくりと……。他方、ストーリーの展開だけでなくわかるのが、「聖杯」に関する謎解き。皆さん、この映画を観た機会に是非1

度パソコンで『最後の晩餐』の絵を取り出して、イエス・キリストの左右に6人ずつ並び、思い思いのポーズをとっている12人の弟子（使徒）たちの様子をじっくりと検討してもらいたい。シャトー・ヴィレットのお屋敷の中で展開されるのは、聖杯を杯だと思いきから、それをいくら探しても見つからないのだ、という前提の下に、聖杯は女だというリーの新説（珍説?）。その説の骨子は、キリストに向かって左側にいる人物は実は女性であり、彼女こそがマグダラのマリア、そしてキリストとマグダラのマリアとの間に大きくVの字形にあいている空間が、聖杯だというもの。そう言われてみれば、なるほどと思えてくるもの……。

もともと最後の晩餐ではみんなでワインを飲んだと言われながら、ダ・ヴィンチの絵には杯が描かれていないため、それが謎であるとされており、さまざまな説があるのだから、このリーの説はかなりの有力説……? これぐらいの知識を確認したうえで、スクリーン上で展開される聖杯に関する物語を観れば、より一層興味が湧いてくるはず……。

## 「フラッシュバック」による歴史のお勉強も……

私は今日、キネマ旬報社とキネマ旬報映画総合研究所が主催する映画検定4級の受験申込みをした。その記念すべき第1回の検定日は6月25日の日曜日。昨日はその公式テキストを、東京出張の新幹線の中で勉強する中でさまざまな知識を習得し、また、それまで曖昧だった言葉の正確な内容を把握することができた。フラッシュバックもその1つ。

これは、「進行しているストーリーの時間的な連続性を破って、過去に起きたことを提示する手法。フラッシュという言葉からもわかるように瞬間的な映像を指す」（『映画検定・公式テキストブック』186頁参照）。

この映画は、謎解きスリラーであると同時に、キリスト（教）に関する歴史のお勉強の宝庫。キリスト教の聖地はエルサレムだが、血で血を洗うこの聖地をめぐる争奪戦が、中世の十字軍に象徴される宗教戦争。また、テンプル騎士団や聖ヨハネ騎士団などの名前も、キリスト教の歴史を語る上で重要なもの。

そんな数々の歴史上の物語が、この映画では「フラッシュバック」手法によって、テキパキと要領よく(?)スクリーン上に示されているから、くれぐれもお

見逃しのないように……。

## 観光旅行の素材としても最適……？

この映画の前半は、ルーヴル美術館を中心としたパリ市内と、リーが暮らすシャトー・ヴィレットが主な舞台。ちなみにルーヴル美術館のエントランスにある巨大なガラスピラミッドは、1981年にミッテラン大統領がつくったもの。そしてその8年後地下入口にも逆さまのガラスピラミッドがつけられたが、その「キラキラ」ぶりには賛否両論が……？

私は約20年前にイギリス・オランダ・西ドイツ・フランス・スイス旅行をしたが、その時、フランスは都市再開発の現地視察に終始したため、残念ながらルーヴル美術館の見学はなし。ルーヴル美術館の中がこんなに広いとは意外だったが、1度は自分の目で見学してみなければ……。

そして映画後半は、リーの飛行機に乗ってフランスからスイスへ国外脱出しようとしたものの、あるヒントを得たため、ロンドンへ行くことに。その舞台はテンプル教会とウェストミンスター寺院。私の旅行でも、ウェストミンスター寺院をはじめ、ロンドンのいくつかの観光地は見学したり、テムズ川は今でもよく印象に残っているが、テンプル教会が12世紀にテンプル騎士団の英国本部として建てられた寺院の一部だとは知らなかった……。

そしてラングドンとソフィーの最後の謎解きの舞台はスコットランドのロスリン教会。パンフレットによれば、ここはエジンバラから7マイル南に下った、ロスリンという村にあるとのことだが、そう言われても位置関係は正確にはわからない。しかし、かなり郊外の田舎村だというイメージだけははっきりと……。さらにフラッシュバックで登場するエルサレムやスペインのシーンは、地中海の真ん中にあるマルタ島での撮影とのことだから、キリスト教絡みのややこしい謎解きが苦手な人は、フランス、イギリス、スコットランド、そしてマルタ島の観光旅行の素材として、この映画を活用してみても……？

2006(平成18)年5月18日記